

## 〈書評〉

野田研一・山本洋平・森田系太郎編著  
『環境人文学Ⅰ——文化のなかの自然』  
『環境人文学Ⅱ——他者としての自然』  
(勉誠出版、2017年)

---

加 藤 恵 梨 香

---

『環境人文学Ⅰ——文化のなかの自然』と『環境人文学Ⅱ——他者としての自然』はそれぞれ、人間と自然の邂逅、あるいは両者のあいだの境界について問うている。本書は、文学研究者のみならず音楽や藝術、創作や社会運動に携わるさまざまな論者が多様な視点から、人間と自然の関わりを見つめなおす多彩な論集である。編者のひとりである野田研一氏が立教大学において長年コーディネーターを務められた公開講演会シリーズ「環境と文学のあいだ」をもとに、氏のご退職を記念して2017年、2巻に亘る論集としてまとめられた。

山本洋平が「はじめに」において定義しているように、環境人文学は、「人間と自然の関係をとらえなおす場を創造」する。データや統計学に基づく「環境学」に「人文学」を組み合わせることで、定量化されづらい部分に焦点を当てるのが環境人文学である。1990年代初頭から台頭したこの学問は、人間と自然とはどのような関係にあるのかを、環境倫理学、哲学、あるいは歴史学、文化人類学、環境文学といった観点から論じるものである。そして、本来結びつきづらい環境と人文学を合わせて考えることで、伝統的な自然科学や社会科学が見落としてしまうような現象をすくいとることが可能になる。

第1巻『文化のなかの自然』「Ⅰ 場所と記憶のあいだ」は、風景について語ることに、それを文章化することとはどのような行為なのかを中心に議論が

展開されてゆく。自然を描写するためには、書き手の「個」を打ち消す必要が生じる場合もある。書き手があるままに自然を抽出するには、彼らがどう見るかではなく、自然がどのように見えるのかが重要になる。「Ⅱ 文化と言葉のあいだ」は、日本とアメリカ文化の接触によって生じた「日本らしさ」について、あるいは両者が触れ合うことで生じる問題とはいかなるものなのかについて、各人が論を寄せている。近現代日本文化の形成を読み解くためには、国内のみならず、外側へもまなざしを向ける必要がある。「Ⅲ 自然と生きものあいだ」は、日本の作家たちそれぞれの持つ自然観が、創作にどのような影響を与えてきたかについての対話が交わされる。ジェンダーや人種の諸相を浮き彫りにしながら、創作に携わる人々が、自然のなかに自分をどう位置付けるかを述べている。

第2巻『他者としての自然』「Ⅰ 人間と動物のあいだ」は、「他者」の比喩として機能する動物表象に焦点を当て、人間とは異なる価値によって動く世界と、資本主義経済に支配された社会との対比を抽出すると同時に、人間がなぜ動物を必要としているのかを明らかにする。「Ⅱ 日本とアメリカのあいだ」は、アメリカ社会が、自分たちとは「異なるもの」とぶつかる時に何が生じるのかを問い、「異質なもの」に自分たちの定義をあてはめ理解可能な範囲の中に収めようとする行為が、アメリカ文学にしばしば見受けられることを詳らかにする。「Ⅲ これからの環境人文学」は、素朴な対比の図式だけでは定義できない、人間と自然の新たな関係性についての視座を提供し、この学問の根底にある概念——自己と他者の関わり——の重要性を改めて強調したうえでその未来図を示す。

これらの多様な論考をすべて個別には紹介できないが、以下、筆者が関心をいだいたテーマを3つ整理したい。ひとつは、環境人文学が、自然を客体化し、資本主義経済のなかに組み込もうとする人間の営みに対して、警鐘を鳴らしているということである。例えば矢野智司の「越境する動物がもたらす贈物」(第2巻収録)は、人間と動物との交流を描く民話を題材に、いかに前者が後者の原理を台無しにするかを浮き彫りにする。民話「鶴女房」において与ひょうは、妻つうの織り成す美しい布が、高額で取引されることが分かると、彼女にもっと布を織るように要求する。つうが期待にこたえるために自らの羽を布に変え、命を落とすのは、布の美しさを貨幣価値へとすり替えてしまう人間への警告に他ならない。フランソワ・スペックの「環境意識と文学の意匠——ソローにみる異化の技法」(第2巻収録)は、ヘンリー・デヴィッド・ソローの自然観

と、19世紀アメリカにおけるそれとを対比している。ソローが作成した地図——「いびつな形をした非対称なウォールデン池」——は、たとえば格子図形を用いて氷を切り取ってゆくような、規則性と商業主義に支配された自然観へのアンチテーゼとしても機能するとスペックは説いている。

2つ目のテーマとして、人間と自然のあいだにある境界を超えることが、いかに危険であるかを提示するという点が挙げられる。北條勝貴の「彷徨といふ救済／ザネリの夜——『銀河鉄道の夜』『もののけ姫』に寄せて」(第2巻収録)は、禁じられていた人魚の肉を食することで、永遠の命を手に入れた女性に焦点を当てている。海の神に対する暴力行為への報復として、彼女が住んでいた村は滅びてしまうのだが、ただひとり死ぬことができないこの女性の苦悩は、自然のサイクルに侵入する人間への警告である。同様に、加藤幸子、梨木香歩、野田研一による鼎談、「鳥の影——二一世紀になお自然を描くとは」(第2巻収録)は、現代日本において自然と対峙することの意味を問うている。とりわけ、「脱人間中心主義」という主題に関して加藤が言及した、野性のハトの世話をめぐる逸話は重要である。道路の上に落ちていたキジバトは、しばらくの間保護され、順調に成長するかに見えたものの、与えてはいけな時期に飲ませた水によって命を落としてしまう。たとえ人間が友好的な態度でハトに近づいたとしても、それは自然の摂理へ手を加えることであり、不必要な介入に他ならないことが浮き彫りになる。

加えて環境人文学は、理解可能な範囲の外側に置かれている「自然」あるいは「他者」とどのように向き合うべきかを示唆し、さらには外へ目を向けることが、いかに自己定義にも還元されてゆくのかを示す。「異文化の音、自然の音——音楽を〈異化〉する」(第1巻収録)における細野晴臣、三上敏視、野田研一の鼎談は、外側と内側の接触についての視座を提供している。たとえば細野は、アメリカからやってきたロックをどう受容し、自分の音楽のなかに取り込んでいったかを述べている。日本らしさを作り出すこととは、異文化を通じて自らの姿を確認し、両者の特性を消化する行為に他ならない。さらに細野は、バンド・はっぴいえんどとして制作した最後のアルバムの中に、それを示す重要な曲があると述べている。細野は、「さよならアメリカ さよならニッポン」という歌に、異文化と邂逅することで、それまでの日本らしさとは違った側面が浮かび上がる可能性が示唆されているのだと主張する。さらに、北川扶生子「〈私〉をつくる教室——自然・メディア・書くこと」(第1巻収録)は、個人が社会に向けたまなざしが、翻って自己にも向けられることを論じている。

北川は、明治期における美文ブームを引き合いに、多くの人々を書くことに熱中し、こぞって新聞への投稿に取り組んでいたのは、各個人が自分を社会の一員であると示すためだったと論じている。北川はそれを、各人が自己を「地縁・血縁・身分」から切り離し、資本主義が必要とするような「個」へと変化させることと同質であったと論じている。

かくして本書は、野田研一が「おわりに——「あいだ」の世界」において述べている通り、「文学からの環境研究というべきエコクリティシズム」がどのようにしてつくられ、異なる学問領域が互いにとってなぜ必要不可欠な研究分野として成立したのかを辿る。バリエーション豊かな論文集の魅力をこの短い紙面で伝えることはできないが、あらゆる学問にたずさわる人々に、さまざまなベクトルへと向けられた視点や有益な指標を与えてくれる贅沢な2巻本である。